

見立ての美

第一章 日本の絵画と見立て

《江口君図》

紫の打ち掛けをまとった美しい女性が、白象の背に乗り、文（ふみ）を読んでいます。鎌倉時代初期に編纂された『新古今和歌集』には、修行僧西行（さいぎょう）が江口の里（現・大阪市東淀川区）で雨宿りをしようとした時の遊女江口君（えぐちのきみ）との門答歌が収録されています。そこから作られたのが、観阿弥（かんあみ）の謡曲「江口」。ある旅の僧が江口の里を通りかかった際、『新古今和歌集』に収録された西行の歌を口ずさむと、どこからともなく江口君の亡霊が現れ、白象に乗った普賢菩薩（ふげんぼさつ）と化したというもの。基本的に普賢菩薩は白象とセットで表現されます。本作はこの謡曲を題材とし、神秘的で気品溢れる江口君が描かれています。

駒井源琦

1747（延享4）年、京都の根付彫職人の家に生まれました。円山応挙（まるやまおうきょ）に師事し、最初期の弟子として知られています。長沢芦雪（ながさわろせつ）と並び称され、師の画風を忠実に継承しました。とくに美人画を得意とし、色彩の美しさや細部の緻密な描写に定評があります。円山応挙とその門弟12名の筆による障壁画165面、国指定重要文化財にも指定されている大乘寺障壁画にも参加。円山派の発展に務め、1797（寛政9）年に師の後を追うように亡くなりました。

《近江八景図》

「近江八景」の8つの景色が8幅の掛軸に描かれています。それぞれに四季のイメージが割振られており、桜の咲く園城寺（三井寺）を描く「三井晩鐘」と春霞たなびく「矢橋帰帆」は春、唐崎の松に夕立のような雨が降る「唐崎夜雨」と青々とした緑が眩しい「粟津晴嵐」は夏、紅葉に彩られた石山寺を描く「石山秋月」と鮮やかな夕映えの「瀬田夕照」は秋、渡り鳥の雁を描く「堅田落雁」と雪景色の「比良暮雪」は冬と考えられます。画面の各所には「もや」のようなクラデーションが多用され、遠近感を意識した表現がなされています。

野村文挙

幕末の1854年（安政元）、五個荘を本拠地とする近江商人の京都の家に生まれました。本名は松太郎、字は子融、号は石泉、福吉翁。1867年（慶応3）浮世絵師の梅川東挙に入門、師事して2年後に亡くなったため、1869年（明治2）四条派の塩川文麟に師事しました。1877年（同10）に開催された第一回内国勸業博覧会をはじめ、絵画共進会や万国博覧会などで秀作を出品し、受賞を重ねます。1880年（同13）に京都府画学校が設立されると着任し、京都画壇の中での地位を固めました。1885年（同18）森寛斎に師事するも、明治20年頃上京し、1889年（同22）に学習院の絵画教師になります。1907年（同40）第1回文展（文部省美術展覧会）で《月下溪流》が三等賞を受賞、第二回文展からは審査員を務めます。1911年（同44）急性肋膜炎で没。

第二章 工芸と見立て

《信楽手桶形水指》

信楽焼の伝統を重んじる上田家の作風がいかんなく発揮された作品。初期の作品ながら、信楽焼特有の武骨で素朴な作風の中に五代直方の持ち味である焼締めを肌を生かした温かみのある風合いが存分にあらわされています。また、広く開いた口にふっくらとした曲線を描く取っ手を配することで大きい空間を演出しています。初めて出品した公募展第1回朝日陶芸展の入選作品です。

《信楽火桶形水指》

本作は焼締めによる多彩な景色を楽しむことができる作品です。釉薬をほどこさず高温で焼き締める信楽焼は、焼成時の窯の中での位置や、炎のまわり具合、温度、湿度、土に含まれた成分などの微妙な条件の違いで、表面が変化します。こうした変化は、やきものの「景色」と呼ばれ、鑑賞の対象となっています。まるで炎の色をうつしたような火色と、いわゆるヌケと呼ばれる素地色の対比、灰が被ることのできた黄色い変色が、絶妙な景色を作り出しています。

《信楽臼形水差》

落ち着いた色合いの火色と信楽特有のざっくりとした土の肌合いが、侘びた景色を作り出しています。五代目上田直方は、桃山時代の古信楽に興味を持ち、信楽焼の伝統技法を守りながらも、独自の作風を盛り込んだ信楽茶陶を制作し続けました。このことから1991年(平成3)には、滋賀県指定無形文化財保持者に認定されています。本作は、上部に縞模様を配すなど、古信楽茶陶の雰囲気参考にしながらも新しいモダンな感覚を加えています。

上田直方（五代）

高橋楽斎とともに、信楽焼の双璧と謳われる上田家の五代目。上田家は幕末から信楽焼の茶陶の名手として名を馳せました。初代は石田直方と名乗ったが、二代目より上田姓に改めました。五代上田直方は、父である四代目の子として信楽の地に生まれました。1946(昭和21)年に京都国立陶磁器試験場を卒業した後は、四代目の指導を受けながら作陶に励みます。1976(昭和51)年には五代上田直方を襲名しました。信楽焼の滋賀県指定無形文化財保持者として認定され、文化庁によって地域文化功労者として表彰を受けるなど、輝かしい実績を誇ります。上田家は信楽焼の伝統の本流を汲む家系で、焼き締め焼成と自然釉が作り出す素朴ながら繊細な作風が特徴です。五代直方の作品も信楽焼の真髄である佗びの境地を見事に体現しています。

《杜》

第11回日本伝統工芸展出品作。1961年（昭和36）まで5回連続で日本伝統工芸展の受賞を重ね、翌年からは特待出品となります。本作を制作したのは、新進気鋭の染織作家として活動を本格化させた時期にあたります。藍色の格子に緑、藍、黄色が段状に配され、全体で杜を思わせるグラデーションになっています。緑は最も草木を連想させる色ですが、実は植物の葉から直接に抽出することが難しい色で、志村は、青と黄を掛け合わせて染めることが多いと語っています。

《聖堂》

当館が最初に収蔵した志村ふくみ作品。藍染めの地に、緋の技法でキャンドルの意匠を織り出した紬織着物です。旅行先のヨーロッパで教会の情景に着想を得ており、縦糸に濃淡をつけることで炎のゆらぎを表現しています。日本の伝統的な技術と、西洋的なモチーフが融合しモダンな印象を与えるとともに、藍地に浮かぶキャンドルの一群から、祈りの荘厳さが感じられます。

志村ふくみ

近江八幡の医師の次女に生まれます。1926年（大正15）、父の実弟にあたる志村家の養子になり、東京へ移り住みました。養父の仕事で上海、青島、長崎と居を移しながら成長し、1942年（昭和17）文化学院を卒業。1955年（同30）に実家のある近江八幡市に移住、かねてより興味を持っていた織物、特に植物染料の色を活かした紬織に取り組みます。1957年（同32）に師事していた木漆工芸家の黒田辰秋により推薦され、第4回日本伝統工芸展に初出品、初入選。第5回展から

第9回展まで連続して受賞を重ね、染織作家としてのスタートを切りました。1968年（同43）京都嵯峨に移住。1990年（平成2）に重要無形文化財「紬織」保持者（人間国宝）に認定されます。随筆家としても知られ、第10回大佛次郎賞受賞『一色一生』はじめ、著作多数。

《花籠 つぼみ》

編み目の大きさや編み方のヴァリエーションの多彩さに、杉田の確かな技量を窺い知ることができます。また、竹のしなやかさを活かした優美で繊細な造形は、花ひらく前のふっくらとしたつぼみを思わせませす。第32回日本伝統工芸近畿展（平成15年度）に出品されました。

《潮騒》

渦巻く潮の中のリズムを表現した作品と、作者自身が述べるように、複雑なフォルムの中に、整然と並んだ竹ひごの筋が一定の規則性を感じさせます。大きく湾曲する外形は実際の大きさ以上の迫力を感じさせますが、技法を違えて二重に編み込んだ技術は非常に繊細です。竹のしなやかさ、温かみを活かしながらも、スケールの大きい作品を生み出す作者の代表作です。改組第3回日展入選作品。

《花籠 春の海》

一定のリズムをもって編まれた波紋のような文様が、おだやかな波のせせらぎを想起させます。また、側面の細やかな四つ目編みの整然さに杉田の技量が表れています。竹籠は元々、農器具や台所で多く使用された身近な籠ですが、一個の造形芸術として、確かな存在感を感じさせる作品です。

杉田静山

大阪市生まれ。本名春男。12歳で病気により聴覚を失い、また13歳の時に戦災の影響で両親の故郷であった野洲市に移ります。ここで、野洲川の竹を用いた竹細工と出会い、独学で竹籠作りを始めました。

長い試行錯誤の中で籠以外の竹工芸にも打ち込み、日展や日本伝統工芸展で賞を受けるまでになりました。1997年（平成9）には竹工芸の滋賀県無形文化財保持者に認定され、同年には内閣総理大臣表彰にも輝いています。静山の竹工芸の作風は、非常に細く割いた竹ひごから作り出される、きわめて繊細な表現に特徴があります。竹のしなやかさを最大限に活かしながら、温かみのある作品を編み上げています。四つ目編み、六つ目編み、網代編みなど、編み方のレパートリーも豊富で、時にはこれらを組み合わせて作ることもあります。特定の師にはつかず、独自の境地を生み出した静山の作品は見る者の多くを魅了します。

第三章 現代美術と見立て

《ヴァリーズ》

ヴァリーズ、とはスーツケースのような旅行鞆のことです。旅行鞆に見立てられた箱の中には、デュシャンの主要な作品のミニチュア・レプリカ、写真、複製が収納されています。1926年に作品制作を放棄した彼が、これまでの作品を簡単に持ち運べるように、と制作した本作は、平面作品だけでなく、代表作の《泉》(1917)や《彼女の独身者によって裸にされた花嫁、さえも》(別名:大ガラス)(1915-1923)などの立体作品も見ることができます。

マルセル・デュシャン

1887年、フランスのノルマンディー地方生まれ。パリの私立美術学校アカデミー・ジュリアンで学び、1915年にニューヨークに移住します。車輪やシャベルなどの既製品を用いたオブジェをレディメイドと名付けて制作しました。1917年に男性用小便器にサインした《泉》をアンデパンダン展に出品し、本来、無審査にもかかわらず展示を拒否された事件は、美術史における大きな出来事として記憶されています。芸術という概念そのものに挑戦するようなデュシャンの制作活動は、コンセプチュアル・アートなど、その後の美術に絶大な影響を与えました。1968年、フランス、ヌイイ＝シュル＝セーヌで死去。

《八島孝一作品》

八島の作品は落とし物の組み合わせから成り立っており、その素材は洗濯バサミから時計、ミントタブレットの空き容器など、多種多様です。《蛙》や《自転車に乗った猫》からは、多くの素材をそれぞれの形状や特性を活用しながらミックスする、八島の巧妙な技術が見て取れます。一方、《スーパーマン》や《ヘリコプター》などに見られる最小限の素材の組み合わせで的を射た形を表現する引き算的なセンスも、八島の作品において重要な要素といえるでしょう。

八島孝一

大阪府生まれ、在住。意外性のあるモノとモノがテープで貼り合わせられ、手のひらサイズのオブジェが制作されています。これらの作品の素材は、八島が、福祉施設へ通う道すがらに拾い集めた落とし物です。もともとモノを拾う習慣があった八島ですが、制作を始めたのは、1996（平成8）年の病原性大腸炎 O-157 の流行がきっかけでした。衛生上の理由からモノ拾いが禁止され、八島は一時、この習慣を我慢しましたが、やがてモノ拾いを再開します。そして、それらを組み合わせさせてオブジェを作り始めました。作品を制作し始めた動機は本人から語られていません。一方、当時、八島を支援していた福祉施設のスタッフは、「拾い集め」から「組み合わせ」という表現行為への発展について、「モノを拾うことを認めてもらいたい」という八島の意志表明の一環でもあったのではないかと推察しています。

《白いかたちたち》

白い立方体の上には、お皿をひっくり返したような形や、家を思わせる形など、簡明な形体が立ち現れています。シンプルであり、かつ素朴な形は、あらゆるイメージにつながる豊かさを持っています。さらに、それらが集合することで、動的な空間を生み出している点も本作の特徴と言えるでしょう。2014（平成26）年に当館で開催された「現代陶芸 笹山忠保展—反骨と才気の成せる造形」に出品されました。

笹山忠保

滋賀県甲賀郡信楽町（現・甲賀市）生まれ。1957（昭和32）年岐阜県立多治見工業高校図案科卒業後、信楽の陶器問屋に務めながら、県立窯業試験場に通い、平野敏三や日根野作三に学びます。1960（昭和35）年京都市立工芸指導所陶磁器技能者養成所に研究生として入所、作陶集団マグマに参加。1962（昭和37）年、工芸指導所を修了し、信楽に帰郷、翌年信楽クラフトマン協会を結成します。1967（昭和42）年、前衛陶芸運動を展開し、「オブジェ焼き」という新たなジャンルを生み出した走泥社（そうでいしゃ）に参加。その後、アメリカやヨーロッパの美術、特にミニマルアートなどの影響を受けつつも、同時に日本の精神性を意識した作品を制作してゆきます。2014（平成26）年には、個展「現代陶芸 笹山忠保展—反骨と才気の成せる造形」を、当館で開催しました。

《百年後に見る鳥と魚の夢》

この作品は、2021（令和3）年の滋賀県立美術館リニューアルオープン記念展「Soft Territory かかわりのあわい」のために制作、展示されました。作家の祖母の生きた人生と、再開館に当たって当館の館名から外れた「近代」、その二つの時代の重なりから、本来出会うはずのないもの同士の出会いを夢想した作品です。当館のコレクションであるコンスタンティン・ブランクーシ《空間の鳥》（台座：1925、彫刻：1926 [1982年死後鑄造、ed.2/8]）を3Dスキャンして再設計されたルアーと、1925（明治14）年に食用として日本に移入したブラックバスが琵琶湖で出会います。発表当時、その抽象的な形が芸術作品として認められなかった前者と、現在は有害な外来魚として駆除対象になっている後者の出会いによって、作家の個人史と美術史、土地の歴史とそこに関わる人々の存在が交錯します。

石黒健一

神奈川県生まれ。2009（平成21）年京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）専攻卒業。2011（平成23）年広島市立大学大学院博士前期課程修了（現代表現領域）。2020（令和2）年京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）大学院グローバルゼミ修了。石黒は彫刻家として、物に付随する価値の不確定さを主題としています。その制作は、モチーフの歴史的文化的そして社会的な背景の詳細なリサーチを行うことから始まります。これまで、打製石器や、石貨（石で作られたお金）、荒地を開墾（かいこん）した鍬（くわ）、伐採されてしまった大木などを題材とし、新素材のシリコンやその土地でしか取れない石、3Dプリンターなど、さまざまな素材を用いて、作品を異なる文化や歴史

に接続することを試みてきました。またその作品は彫刻を核として、映像やテキストを組み合わせたインスタレーションとして展開されます。現在、共同アトリエ「山中 suplex」（大津市）に所属し、活動しています。